

## 光明第二号

- 一、毎月十日までの入団者にその月の光明を送ります。
- 一、団費がもうたくさんになりましたから、紙代月三銭宛一月末迄に、お送り下さい。遠方の御方は毎月郵税がいりますのでいくらでもよいからどうかして下されば、狂風どんな喜ぶでしょう。
- 一、投書は五日迄のを、其の月に出します。教える立場に立つて書いたものより、皆さんの心持ちや、生活のかわりかた等をすきます。しかし、どんなものでも喜んで御受けします。悲しいこと、嬉しいことなどをも御聞かせ下さい。私信で。
- 一、光明日誌をつけていますか。これ位の小さなことが出来ない様な者が、どうして、大事業が出来ましょう。皆さんの目覚めた生活を毎日書く愉快をお知りなさい。
- 一、光明はくれぐれも雑誌ではない。愚な狂風が兄弟姉妹に送る手紙である。僕の血がなすりつけてあるのだ。一度で捨てる人は、わかりきったことと笑う人、二度読む人はそうかと知る人三度、四度と読む人ほ何か嬉しくなるか。

## 巻頭の叫び

- 一、新年が来た。覚醒せる最初の新年が来た。僕らの雄々しく優しく正しく嬉しく燃える心は如何に幸福だろう。
- 一、冬だからよい。あの雪の様に心を清く、あの梅の様に、寒さを忍んで働こう。春は嬉しい、ちようど我らの光明の様に、野も山も木や草が芽を出す。花を開く。そして天は我らを楽しませる。あの桜の様に心を潔く持ちたい。夏は好きだ。あの暑い砂は熔け、水は煮える様な時に、一口暑いとも言わず清い汗を出してこそ我らの心は玉となる。秋は尊い。革も木も実がみのる。そしてそれを祝う様に紅葉がこの世を飾る。我らも一度はあの様に心に尊い実をむすび、紅葉の様な錦を飾らねばならぬ。
- 一、我らは男だ。脂汗を出して働きたい。手を汚すことや骨をおろすことは飯よりも好きだ。我らの正義と努力との前には何物の障害もない。
- 一、我らは真に新しい女子だ。人生を極楽の様に美しく楽しくするのは我らがいるからだ。愛を知った、我らの力を知った。「柔よく剛を制す」我らは優しく強いで強い。
- 一、我らは理窟も言わぬ。自慢もしない。心が言うままに正しく行っただけだ。善いことがしたい。本気でしたい。そして本年を有益に送りたい。

## 若き同胞よ (二)

## 四、流汗鍛錬の生活

流汗鍛錬の生活とは、汗肝を出して、困難な仕事をして、精神や身体を鍛えあげる生活、難難辛苦の生活の事だ。人間に仕事の無い者はいない。難難辛苦のない人間はいないかも知れない。しかし、嫌々ながらなるべくすむことならば、それをしないで汗を流さず手を汚さず、骨を折らずに楽がしたい。仕方がなければしようという人間が多い。それではいかん。背から、少しでも人よりもぬけ出でた人は、自分から進んで辛い仕事を好んだのだ。

僕とあなたと二人は、この身体と心とがある間は、その境遇によつて、人のいやがる様な辛い事を自分で進んでしななければならない。辛い事をする時の心を考えて見よ、これ位愉快なことはない。辛い事ほど面白くなつた者は、真に幸である。辛苦難難に出会う度に、僕は何物にもかえられない尊いものを心の中に得るのだ。正宗の名刀は決して楽では出来ない。銅銭を火に入れては焼き、出しては打ち、打つては焼き、焼いては打つて鍛えあげて、磨きすまされたから出来たのだ。僕らは辛苦に出会う毎にそれにうちかてば、その度に、鍛えあげられて、正宗の名刀になるのだ。

直接自分の利益にならない仕事をするために集つた青年をよく見よ。暑ければすぐ木の陰に、寒ければすぐ火の側に集まる者が皆だ。何という不幸な奴等だろう。人に辛い事をさして見ている様な彼等に一生涯何が出来よう。手をよごすことの嫌な彼等の先は見えずにいて、一生涯何も出来ない。涙の出る程あわれな奴等だ。炬燵<sup>2</sup>に入つて寒い寒いと言つておれば、便所に行くのも、ここにある本を取るのも大儀になる。面白いと思えば、大雪の中を山にでも登られる。あなたが「辛苦は愉快だ。」大きな辛苦が来い。」と自覚すれば、辛苦が来るほど愉快である。そんな精神になれた時、あなたはここに岩をも山をも火をも水をも恐れぬ力を得るのだ。

世の中の弱い人間は常に「ああ辛い、とてもやりきれない、忙しい、骨がおれる、時間がない、金がない」と愚痴ばかりこぼす。そして辛苦をたくさんためておく。ためておいて泣いているから、次から次と辛苦がわいて来て、何も出来なくなるのだ。僕やあなたはそれではならぬ。「お、いくらなりと来い。大きな辛苦がいくらなりと来い」と辛苦を次から次と征服して行けば、常に自分の手の中は空だから、どんな辛苦が来ても、喜んでそれに打ち勝てるのだ。だから、流汗鍛錬の青年の前途には光明がある。そして幸福がある。汝は辛い「つ」の字も口に出すな、辛い仕事に出会つたら、

天将降大任於是人也。先苦其心志劳其肢身体 (孟子)

(天の将に是の人に大任を降さんとするや先ずその心志を苦しめその肢体を努せしむ) と言う孟子の言葉を思い出して、じつと耐え忍んで辛苦に勝て。言葉の如く、天が是の人に一つ大きな仕事をさしてやろうかと思えば、まずその人に辛苦を授けて、その心を苦しめその体を使って見るのだ。もしその試験に敗けたら天は他の人にその大仕事をあたえるのだ。そして、この天の試験は一度ではない。毎日毎日あるのだ。汝はこの試験にかたねばならぬ。そしてその力は汝の心の中にある。

五、醒めよ醒めよ、醒めずんば前途一生は悪だ苦だ。

楽はしたい。甘いものは食いたい。金はほしい。辛苦は嫌だ。心が辛い、体が辛い。何というまちがいだろう。そんな人間は死んだ方がいい。生きておれば一生涯辛い情ないと愚痴ばかり言っている様だ。金になりそうなところにひよろひよろ、楽な様なところにひよろひよろ、そんなことでどこに、尊い人間らしいところがある。正しく進み、力一ぱい働いて見よ、人間になれる。金が得られる。名誉にもなる。もし、何物も得られなければ、それこそ自分の罪ではない。その時こそ、笑って、愚痴なしの貧乏にも馬鹿にもなれる。それでも自分の心だけは尊くなっている。是が醒めたのだ。かくわかつたのが真の幸福で光明団の人の行くべき道だ。

## 一犬虚を吼えて万犬実を伝う

一犬虚を吼えて万犬実を伝う。 〓犬となるな、犬となるな。

人は皆寝静まった真夜中に一人の旅人が通って行きました。ある家の前まで来ると一匹の犬が突然「ワンワンワン、盗賊だ盗人だ！ ワンワンワン」と吼えつきました。旅人は急いで行きましたがもう駄目です。そこで遊んでいた犬は皆その通り「盗人だ！」と高く吼えました。向うの谷の犬もそれを聞き、こちらの丘の犬もそれを聞き、そして次々に聞き伝えてその通りを吼えました。旅人は言うまでもなく盗人では無かったのです。一犬のまちがいは万犬のまちがいとなって、その旅人は盗賊になってしまったのです。

世の中には、他人の噂というものがたくさんあります。他人の不名誉になる噂がたくさんあります。どこに行っても必ず噂があります。その中には善いことや悪いのや、どちらにもつかないのやありますが、悪い方が多いようです。その中には実際あった事もありましょう。しかし、根もないことに噂の立つことも多くあります。人間という者は、他人の良いことを言うよりも悪いことを言うのを好むものです。犬は決して、良い人間を見て鳴くものではありません、犬が吼えるのは「悪い人間」と見た時鳴くのです。人間の内でも他人の悪口や悪い噂を好んで言う者は犬の心を持った人なのです。犬の様に心が臆病者で、犬の様に何か悪い奴はいないかと鼻を動かして、そこそこをたづね歩いて、面白そうなことを見出すとすぐにそれを外の者に告げて歩くのです。

犬が吼えるのは嬉しいからではなくて恐いのです。人が犬の様にするのは自分の心が悪くてまがつているからです。たとえあったことでも他人の不名誉になることは言わないことにしましょう。僕とあなたと二人だけは犬にはなりませんまい。あった事でもない事でも人の悪いことは言わないで、善いことなら必要があれば語りましょう。最初の一犬はもちろん悪いが、万犬も同じ事です。僕やあなたが犬になつた為に他人にどんな迷惑をかけるかも知れない。たとえあなたに害を与えた人間や、あなたの悪口を言った人のことでも悪く言つてはなりません。もしあなたを悪く言つたからとて、あなたも悪く言えば同じことで、あなたはやはり善くはないのです。僕とあなたとは犬の様な心を少しづつでも直して、人になりましょう。

もし又あなたが万犬に吼えられた時は、よく自分で考えてみるのです。もし実際あったことを言われたのなら、すぐ人を忌むことなしに、心から改めて、直さなければならぬし、もし無いことであつたら、あなたの心は何ともありません。正しいことはあなたの心が知っているし、天が知っています。言いわけをすることもいらぬし、心配することもない。否、かえつて、「僕らは正しい！」と心の中の嬉しさがわかるのです。だから私もあなたも行を正しくしなければなりません。

## 愛は貴女の生命である！ 愛は人生を美化し浄化する！（二）

解りましたか。愛の尊さがわかりましたか。愛の泉が貴女の心の奥にこんこんと音を立てているのが聞えましたか。皆さんの愛の泉の水が綺麗に綺麗に澄んでそれを哀れな者に飲ませた時、皆さんの心は嬉しくて嬉しくてならなくなります。愛の泉は、流れても流れてもつきることはありません。

「女は弱い、母は強い」という諺がありますが、なぜ母が強いのでしょうか。平素は弱いと見える女子でも、自分の子供が危い時や不幸な時には、おどろく様な強い女となるものです。貴女は高等科の読本で「母の愛」という題で、自分の子が獅子の餌食になろうとしたのを助けた婦人のことを読んだでしょう。母は自分の子供のためなら大変な力をあらわすのである。その力は何から出るのでしょうか。前号で言った様な「絶対の愛」の発見です。何故貴女の力のある愛の心が曇って力も光をも失うのでしょうか。

由来女子の心は感情的で正しく働けば勇気と変つて力となりますが、一度悪く進むと邪見、慳貪、傲慢などの心が燃えたり、疑惧、嫉妬の黒雲となつたりして、人を困らせ、人生を醜くし、かえつて人生を汚くします。貴女も時々見るでしょう。ここらの家で婦人が青筋うかして怒って泣いて、夫や子供をてこずらしているのを。又、二人の婦人が集るとすぐ、立派な話ではなくて、人の悪口や自慢や愚痴ばかり多くあります。そんな人達は、自分の都合の好い時だけ人を愛して、自分の心の激した時は、兄弟であろうと、夫であろうと、主人であろうと、自分の子供であろうと、友人5であろうと、すぐの間に敵としてしまいます。こんな女子は夫に対しては小さなことから嫉妬心をおこして夫の愛を失い、いらぬ人の悪口のために、夫に迷惑をかけ、夫婦間を冷たいものにし、自分の兄弟の間は喧嘩づくめにし、子供を叱るかわりにおこつて子供の心をねじけさせ、友達との間も面白くなくて、二三日すれば友達がかわる。

かくしてこんな女は、人生を美しくきれいで尊いものにするかわりに、この世をこの女子があるために、不愉快な汚いもの、即ちこの世を地獄にかえて行きます。話も聞いたでしょう。年老いた女が愛の尊さを知らないばかりに、その嫁を殺しその孫を二人も殺し、ひいてその同情者たる若い女子を殺したでしょう。死んだ人たちの周囲には、どんな悲惨な事柄がおこつたでしょう。

あゝ！ 世の中を地獄と変える者は男子ではなくて、年老いた女子に多いと知るとき、あなたは何と考えます。鬼となる女、それはその人にとって、大楽な不幸です。こんな不幸な人はありません。愛を知らないからです。貴女の生命である愛の力を知りなさい。自分に親切にしてくれない者を愛しなさい。人が悪い、親が悪い、夫が悪い、子どもが悪いと言っているのは、目がさめたものではありません。よくしてくれらる者を愛することは誰でもします。悪い人を愛してごらん。そして「ああわしが悪かった」とその人が懺悔するまで力強く愛してごらん。こうして一人を救った時、貴女は心からの幸に泣くでしょう。その時の貴女はこの上なく尊く美しく幸せな方です。（つづく）

## 『雁の羽音』の中から

皆様から来た手紙やはがきや投書は一枚も残さず綴って、その表紙には『雁の羽音』と書いてあります。

(1)、先生の前に飛んで参ります！

……先生は、僕の濁った心を清い心に入れかえせんが為に、色々と苦心なされて、度々有益なる事を仰せ下さる度毎に、まことにそうではあると思っていました。が、年末の最後の十分間の御言葉は、深く深く身にしみました。先生、僕はうわべで申すではありません。めでたい大正八年を先生に教導され刺激されて、将来有為の青年となる事を、今、午後十一時五分を以て僕の腸をたゞきかためて、決心しました。出鱈目を書いていきますがよくよくお察しごらん下さい。中略……先生がこの間から度々仰せ聞かせ下さったが、僕の様な、貧しい家の子を先生がじきにお率いになつて、光明の道に引きあげようとして下さるのは、如何にも釣合が悪くてだまつていました。が、もはや隠すに忍びないから、今は心を打ち明けて、先生の前に飛んで参ります。ふつつかな者ではありますが、どんなにでも、僕を教え、使つて下さい。………下略（十五才少年）

あゝもつたいたい。何という有難い尊い決心でしょう。僕がしたのではない、自分でなつたのです、僕にはこんな大きな事をする力はない。何度僕は手紙をおしいただいたでしょう。この「十五才少年」の日誌のところどころを書いて見ます。（日誌は見せてもらつたのです。）

十二月二十六日、雪。…略……学校に行つた。先生が、貧しい者は幸であると言つて僕を刺激して下さつた。僕の体を先生の血が常に流れているかと思うと、歓喜は胸にあふれ、嬉し涙は、頬を流れた。学校から帰つて、今までは白をつけと、母に言われれば、いやでたまらんだが、今日は妹等のついた後で、僕一人が米を入れて、先生のおつしやつたことをつくづく考えて快く米をついた。……

十二月二十七日、曇風。…略……薪小屋に入つて薪をつみかさねたが余りがまだたくさんある。大儀になつたから家の内へ帰ろうとしたが、この時、昨日先生から言つて聞かされたことを考えた。そして、今父は何をしているだろう。破れかけの草鞋をはいて、重い荷を肩にして、僕らの為に、ここかしこかけ回り、雪氷の中をビショビショと歩いていられる事が目の前に浮かんだ。何で火にあたつていられよう。……略す……

十二月二十九日、雪。朝、起きて、今までは僕の寢床をあげていなかったが、今朝は僕が真先きに蒲団をあげたら、妹まで言い付けのないのに蒲団をあげだした。その時、あゝ僕から先にやらねばならないと思つた。…下略。

ああ何という尊さだろう。僕はこの一人を得たのみで満足です。皆さんよ、この少年の先を見よ、光明は見えている。二十年先で如何にこの少年がなるか。若き人よ、光明が見えたか。

(2)、どうしてこんな心になれたでしょう。(小菊女)

……先生どうも有難う御座います。書き物くりかへしくりかえし拝見致しました。先生のおつしやる事を守って、つとめます。覚めます。私は書き物を載いてより後は、人を羨んだり、悪んだり、しない様になりました。悪むべき人を見ても、むしろ気の毒な可愛相なという気になりました。ほんとにうれしう御座います、心からうれしう御座います。今頃妾は、あの書面を家内の者に話して、聞いてもらって、よいことに心が向く様につとめています。先生よろこんで下さい。私の様な者が、どうして、一時でも一分でも、こんな心になれたのであろうかと、不思議の様です。これもみんな先生のおかげです。私は、初は、あんな心になれるだろうかと疑っていました。しかしそれはまちがいでした。あゝほんとにうれしい、おかげです、この喜びをお察し下さい。……下略

何で僕の方でしょう。天によつて、神によつて、あなたが救われたのです。僕は泣きました。

(3)、嬉し涙が一ぱいわき出しました。(来雄)

一月十一日、先生僕は今まで先生が骨折つて、あれ程修身の時間や、その他暇の時や、僕が学校に遊びに行つた時など、僧侶の方が法を人に説いて聞かせる様に、親切に、僕らに人の行くべき道、ためになる話をして下さつたのに、今日の様に先生を思つた事はありません。今日僕が、「先生に」という綴方をもらつた時、作文の終りに書いてあつた事を読んで、真に先生の心の奥を察しました。あゝ先生は真に親切な御方です、僕は今日まで目が覚めなかつたのです。今日初めて、先生の御親切に愛の力におどろいて目が覚めました……中略……僕が、この間光明第一号を作りに行つた時、未だその仕事了らないので学校に行きましたが、昼食を食べに帰つた時誠に大儀にありました。しかし、先生のお言付けと思つて仕方なく、学校に行きました。今日先生の話をきいて、誠に感じた事がありました。あの時僕が大儀など言つて行かなんだら、光明第一号があの日には出来ないで十数名の者は、見る事がおくれたかも知れません。

あゝ今日は感じました。働かずにはいらられません。世の中に立つてからも人の道に叛くことも出来ません。覚めずにはいられません。僕は何という幸福な者でありましょう。あなたの様な先生について学ぶ幸福は実に大きう御座います。僕を思つて下さるあなたの様な先生かどこにいられましょう。作文の終りにお書き下さつたのを読んだ時眼中には嬉し涙が一ぱいわき出しました。僕は身体に不足があつても、そのために、先生の様思つて下さる人があるのを知つては何とも悲しくありません。

これも私の約束です。……是を書いた時の僕の心の中はどの様でありましょう。今からは先生と一緒にさめましょう。

ああ、なつかしの兄弟よ、嬉しいやら、悲しいやら、涙が笑顔の中から限りなく出ます。又一人を救いました。皆さん赤裸々になりましょう。あゝ尊い。



## 激語欄

□ 光明団も皆様のお骨折りによつて、日々盛んになつて行きます。何という有難いことでしょう。僕の様なつまらない者がと思つたと冷汗が体中から出る様な気がします。私は皆様にたいしても一層努めなければなりません。

□ 僕の顔も知らないで入つて下さつた皆様よ、名だけ聞いてもなつかしう御座います。顔は知らないでも見たことなくてもあなたと僕との間には尊い人間の血が通つています。

□ 光明団の人は皆兄弟姉妹です。僕も皆さんの兄であり弟であります。光明団の中には、今年頃から大学に行く人もあります。それでいい、兄が弟の出世を祈らずにいられようか。僕は皆様の幸を祈り、一人でも幸福になるように常に祈ります。どんなに出世しても弟はおとうとです。どんな不幸に出会つても姉様は姉様です。光明団には金力も権力も位も何もありません、唯兄弟です、姉妹です。

□ 祈るといふことをまちがえてはなりません。無理な願いをするのではありません。あなたのお母様が病氣と聞いたら、あゝどうか早くなおればよいがと思つてでしょう。それが祈るのです。

□ 人が学問するのは、世の中を渡つて行く力を得るためです、飯を食うのと同じことです。決して鼻の先にぶらさげて人に自慢するためではありません。世の中に飾るための学問をしておれば何の役にも立ちません。お互に注意すべきことです。

□ 僕の周囲に集る人は、皆僕よりも進んでくれました。そして、涙の出る様な有難い人達の中で努力してゆかれます。皆さん何という幸なことでしょう。皆さんはこれを手伝つて下さる皆さんに感謝して下さい。佐々木先生、小便の野田、そして、之を書く道具をただで貸して下さい。役場の大前様、心から礼を言つて下さい。

□ 一人でもよい、二人でもよい、皆さんの周の人を救いなさい。投書は可なりたくさん有りましたが、紙面の都合や、私の考えで出ていないのを許して下さい。して下さつた方には心から礼を申します。以後はどうか、どしどし身近なのをして下さい。教える立場で書くことは特別な方の外、御免を蒙ります。